日本キリスト教会　広島長東教会だより

ミニバラ No.24

〒731-0135　広島市安佐南区長東 3-32-16

TEL/FAX 082-238-3459

2009 年 3 月発行

ミレトスの別れ

「わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

（使徒言行録 20 章 33~35 節）

パウロは、第３回伝道旅行の帰途、船がミレトスに寄港した際、エフェソに出向く時間がないため、人をやってエフェソ教会の長老たちを呼び寄せ、彼らに最後の説教を試みました。パウロはこの時、自分に死期が迫っていることを予期していましたから、此れが、彼らに残す最後の言葉、つまり、遺言となることを意識していました。遺言ほど重い言葉はありません。その中でも、最後に語られる言葉は、最も重い、と言ってよいのではないでしょうか。パウロは、懇々と、また切々と語ってきた、真情溢れるこの告別説教を、主イエスの、「受けるよりは与える方が幸いである」、と言う言葉を引用して締め括りました。だから、この言葉の中にこそ、パウロが一番言いたかったことが凝縮されている、と見て間違いありません。

ところで、パウロは、「主イエスのお言葉だ」、と言って、此れを引用しているのですが、残念ながら、どの福音書にも、この言葉は記録されていません。恐らくパウロが、独自のルートで集めた“主イエス・キリストの語録”の中に、入っていたのでしょう。お陰で、こんな大切な主イエスのお言葉が、パウロの訣別説教が残されたことで、今日まで伝えられることになったのですから、私たちにとっても、このパウロのミレトスでの告別説教は、大変に意義深い、と言うことが出来るのではないでしょうか。

日本の諺の中にも、「情けは人のためならず」、と言う諺があります。その意味は、「情けを人にかけておけば、それがめぐりめぐって自分によい報いが必ず来る。（だから、損にはならない）」、と言うことなのですが、此れは、巧妙な功利主義、密かな利己主義でしかありません。主イエスの先のお言葉を、此れと同じように理解するとすれば、大きな間違いを犯すことになります。

日めくり状の、三浦光世氏の信仰短歌抄の中に、「吾(わ)が持てる　すべてはキリストの賜ひしを　忘れて今日も　心奢(こころおご)りぬ」、と言う短歌が出て来ます。私たちが与えると言っても、それはすべて、元々神より頂戴したもの、キリストより賜わったものなのですから、ただ一部をお返ししているに過ぎないのです。神より受けたものを、一人占めして、恵みを滞らせるとき、恵みは腐敗して、最早恵みではなくなってしまいます。受けた恵みは、他に分け与えることによって、更に豊かになるのです。だから、受けるよりは与える方が幸いなのだ、と言われるのです。

ガリラヤ湖には沢山の魚が棲んでいます。ヘルモン山の雪解け水が流れ込み、更にそれを、惜し気もなく下流に放出しているからです。しかしその水は、死海に注ぎ込んで、そこで終ります。死海は、海面下約４００メートルの所にあり、地球上で一番低い所と言われています。だから、それ以上水は流れないのです。では何故、どれだけガリラヤ湖から水が流れ込んでも溢れないのか、と言うと、熱い太陽光線を受けて、水はドンドン蒸発するからです。しかしそのため、流れ込む水に少量混じっている塩の濃度は、いよいよ高くなるのです。その結果、死海は、一切魚の棲まない塩の海となり、その名の通り、死の海と呼ばれる湖になったのです。

受けた恵みは与えることによって、恵みの循環が起こり、そこに、多くの命が宿るのです。すべからく教会は、そうあって欲しい、そう願わざるを得ません。　牧師　三輪恭嗣

（2009 年 1 月 25 日の礼拝説教より）